

「防災士」というボランティア活動

古田陽久（74126）

コロナ禍での自粛措置で広島の自宅で引き籠りの毎日が続いていた頃、一通のメールが舞い込んだ。地元広島的美鈴が丘まちづくり協議会の防災部長兼美鈴が丘学区自主防災連合会会長をやってくれないかという現職の方からの要請であった。

通常の時であれば、即お断わりするところであるが、正直、時間

をもてあましていたこともあって、最長2年の任期ということである。この地域へのご恩返し、最後のご奉公という気持ちもあって、お引き受けすることにした。

ここには、1990年（平成2年）に東京から引越してきて30年になるが、趣味のコーラスを除いては、コミュニティ活動には余り参加しておらず、果たして、居住人口約1万人、世帯数約4000、17町内会を束ねる防災のトップ・リーダーに立つには自信がなかったのが正直なところである。

なぜ、私なのかというと、2年前に「防災士」の資格を取得したことがその主な理由だ。この町には、現在、8人の「防災士」がいるが、その中の一人で、良く言えば白羽の矢が立った形だが、実際には、警戒レベル3が発せられると真夜中でも緊急避難場所に指定されている美鈴が丘高校の講堂の鍵を開けなければならず、誰もが引き受けたがらない難役なのであ

る。

「防災士」とは、「自助」「共助」「協働」を原則として、社会のさまざまな場で地域防災力を高める活動が期待され、そのための十分な意識と一定の知識・技能を習得したことを、認定特定非営利活動法人日本防災士機構が認証した人とある。

この地域では、2014年8月の豪雨と広島土砂災害、2018年7月の西日本豪雨災害など、想定外の災害が発生、かねてからの安全神話が崩れてしまった。

この仕事をやっていて思うのは、平素からのご近所付き合いと顔の見える良好な人間関係が大切であるということだ。これだけの居住人口のなかには、多様な考え方の人がおられてまとめていくのはきわめて大変である。

改めて感じるのは、防災教育など頭で考えることよりも、多くの体験の積み重ねのなかでの「現場力」が問われることであり、これまでになく「気象」が気になる日

常生活をおくっている今日この頃である。